

# 古神道の和歌から〈こころ〉の実学へ

常吉 由樹子

古神道には原罪はなく、悪魔もないし、終末論もない。『旧約聖書』でのアダムとイブにあたる存在は古神道ではイザナギノ命とイザナミノ命である。アダムとイブは禁断の果実を食べて、そこから原罪が発生して、人間は生れながらにその原罪を背負うということになる。日本の場合イザナギとイザナミをはじめ神々や人間はよく失敗をするが、ミンギをするとその罪は許される。<sup>1</sup>

「古神道」とはどのようなものか、一言で説明するのはなかなか難しい。教義はなく、戒律もなく、ただ、太古から師資相承の口伝によって伝えられた「真法」の集合があるのだ。その当事者は「縄文時代までさかのぼる」と認識しているとしても、実際は、せいぜい平田篤胤の「復古神道」に遡れる程度の、歴史的に見れば、きわめて新しいもの。その一連のものは、彼らみずからの中で、例えば、山田誠人氏著『古神道の行法と科学』<sup>2</sup>に、「古神道を伝承する流れ」などとして図示され、それらは大筋で互いに一致するようである。この『古神道の行法と科学』は、ヨガやその用語である

1 山田誠人氏『古神道の行法と科学』（一九九二年一〇月 B A B ジャパン出版局刊）による。  
2 注1に同じ。

チャクラ、平田篤胤も多大な関心を寄せた道教や、古武術・古典芸能などを取り込み、古神道それ自体を「スーパーアニメイズム」と名付けて、ジエームズ・ラブロックの『地球生命圏』の「ガイア」仮説を取り入れるなどが特筆される。このようなあり方は、ただし、こういった「全体性」を志向して拡大していくあり方は、平田篤胤、出口王仁三郎らの著作に一貫する特徴であるといえよう。彼らは「鎮魂」「帰神」の行法をととき、御幣の折り方、神棚の祭り方から、集中心を増し、靈性を磨くなどを目的とした「行法」の体系を統一感を欠くようでありながら、ゆるやかな統一感をもって、現在も行われている。<sup>4</sup> それらは、いずれも平田篤胤・佐藤信淵はもちろん、黒住教や出口なを・王仁三郎大本教系の教派神道（現行の「生長の家」の故谷口雅春なども含む）を等しくその系譜に数えている。

この領域の書籍について、否定的な見方はたやすくできる。しかし、そのようにして切り捨てがたいのが、これらが一定の支持を受け、ある側面啓蒙書として、またある側面一種のハウツーものとしても、刊行され続けている事実である。通俗で取るに足りないようにも見え、アメーバのようにあらゆるものを取り込んでいく「体質」を維持しつつ、それなりの総体としてのまとまりを保っており、その当事者みずからもそれを自覚しているのだ。

本稿の起点としたのは、この「古神道」と呼ばれるものの中で「和歌」が重要な位置をしめている、という事実である。それはたとえば、「道歌」や「神詠」として、あるいは、「行法」における「唱えごと」として、また、これらの「宗教家」「思想家」自身の「作品」として、である。例えば、「大本教」の二人の教祖の一人である、出口王仁三郎（一八七一—一九四八）は、四万首に迫る数の詠歌作品を残している。彼の陶芸作品程、高く評価出来るものではないことは残念だが。

3 星川淳訳 一九八四年一〇月 工作社 原著は Lovelock, James [1979年] Galaxia: A New Look at Life on Earth. 3rd ed., Oxford University Press.  
4 この他にも、山陰基央『神道の神秘—古神道の思想と行法—』（二〇〇〇年五月刊 春秋社）；大宮司朗『古神道行法入門』（二〇〇三年刊 原書房）など。

彼は、「歌壇に入つて」みて、当時の近代的歌壇にいかにも失望したかを、みずから短い文章に吐露している。

昔から歌人と云へば十中の八九は何れも世捨人の寢言であつたかの感じがする。故に英雄豪傑と云はるゝ人の歌はあまり専門的に多作は無い様だ。併し日本は言霊の幸はふ国である以上、余り世捨人や坊主や医者にのみ任しておきたくない。それで自分は努めて注入し、活潑なる社会を造り万民の幸福をはからむと……。

当時の歌壇の構成員たち、いわば「歌人」たちは、「何れも貧弱なる思想と生活にあえぐ小人鼠輩の集合で、一として豪放さも真面目さもなく、徒に世を呪ひ強者を敵視し外来思想にかぶれたる」もの、「貧乏生活をさらけ出して得意げに歌つて見たり、悲観的な辞句を際限もなく長々と羅列したり、細心的な小心翼翼たる文句を並べてゝて」いるものばかりだという。彼が望むのは「日本男子の本領」であつて、「女々しい泣き言を上手に言つた」歌が「佳作」とされる「現代」の歌人たちの現状は「正気の沙汰」では無いとまで言う。このような同時代の歌人たちへの評価は、この近代教派神道開祖の和歌観を逆光に照らし出す。

彼は、大正十五年五月には機関誌『真如の光』に「歌日記」の連載を始め、昭和二年には俳句の会であつた「月光会」と和歌の会「月明会」を合併して「明光社」を結成し、八月には機関誌「明光」を発刊。その「和歌」の分野における活動も旺盛なものであつた。

5 出口王仁三郎全集五所収、「嗚呼歌人」(昭和五年七月三十一日庚午日記七之巻)より。原文はほぼ総ルビだがそれは省き、旧字体は、現行の印刷字体に改めた。以下、同じ。

惟神かんならの大道を普く天下に宣布して理想天国を地上に建設し、世界万民永遠の幸福と安心を得させむとする機関明光社の歌と、人類の生活のみに即して不平を並べたてる人等ひとたちとは、根本的にそりが合はないのは寧ろ当然だとすれば、現代歌壇に対して余りこき下すのも可愛相でもあり、また無理かもしれない。日本には立派な言霊ことばが幸はつて居ながら努めてそれに遠ざかり且かつ歎よろこんで脱線せむとする現状は真に憐れむべき状態である。明光社人よ、必ず国風こくふうの粹を学びて大成されむことを切望する。

「こき下すのも可愛相」というポーズをとりながら、なおこき下ろし続けるこの辺りは、戦う宗教家の面目躍如といったところだが、それはさておき、「敷島の歌の道」を「惟神の大道」の宣布、「理想天国」の建設と同列に「国風の粹」の大成を庶幾すべきものとして措定されている。

文学の一ジャンルである「和歌」は、ある人びと（大多数かも知れないが）にとつては、現実からくり出され、隔離された「文芸的」なものの領域にある。しかし、ここではそのようにとらえられてはいない。現実感がどうでもいいわけではない。「写生」といい「ただこと歌」といっても、ズカズカと現実に踏み込んでいかない、「礼儀」をわきまえた「上品」なものである。この王仁三郎のコメントをそういう「常識的」パースペクティブの中で見るならば、若干「下品」な攻撃的論法と同様、このような、宗教的思想的政治的な「実効」をもとめる文学観は、あまり評判の良いものであり得ないことは、容易に想像がつく。むしろ、避けて通るべき「臭いもの」に類するだろう。

既存の歌壇に対する威勢の良い全否定は、正岡子規『歌よみに与ふる書』の「貫之は下手な歌よみにて『古今集』は

7 注5に同じ。

一九五五年九月刊『歌よみに与ふる書』岩波文庫 岩波書店。当該部分は新聞『日本』「明治三十一年二月十四日」掲載分の「再び歌よみに与ふる書」冒頭。

くだらぬ集これありそうろうに有あり之候。」を思わせないでもない。しかし、そういう意味では「プロレタリア文学」などという、とてつもなく「下品」なものが、一世を風靡したこともあったではないか。翻せば、「生活に即して不平を並べ立てる」歌にはそういう下品な「実効」が全くないのだろうか。この質問にはすでに13世紀の末、哀傷の歌には、「心が散乱舞動するのを止めて、「寂然静閑」な心境にさせる「徳」がある。」<sup>8</sup>として、『沙石集』の無住が答えてくれている。

二十年来の不景気のせいとか、「実学の時代」——文科系大学の不振——が言われ始めて久しい。しかし、文学周辺を対象とする高等教育は、景気の良いときは、裕福な家庭の子女の「上品な」情操教育としてもはやされるが、景気が悪くなると、不要なものとして捨て去られて良いようなもので無いのはもちろんである。ただ、「あたりまえ」「日本文学は大切な日本文化」などといって、あぐらをかいていられる状況では、もはやないのかもしれないが。とにかく、「神詠」「道歌」といったものをふくめ、時には祈禱や行法における「唱えごと」としても使われる、「敷島の歌の道」と、「上品な」文学としての〈和歌〉——出口王仁三郎に言わせれば「貧弱な思考と生活にあえぐ小人鼠輩」のわざ——はさほど本質的には違わないと、考えてみてはどうだろう。これらの対立する文学観は、「明光社」側からは、当時の「歌壇」は、右に引用したコメントでもわかるように、何の期待も持てない、全否定するべきものである。また、当時のたとえば「写実的、生活密着的歌風」で知られる、「アララギ」派、「アララギ」系の歌人たちにとって見れば、たまに評価すべき良い作はあったとしても、総じて「お話にならない」手合いと見なされていたのではないかと、想像される。ただ、これらは、

8 拙稿『沙石集』の和歌論「和歌陀羅尼論の意義と本質」(活水論文集(現代日本文化学) 第49集 二〇〇六年三月三十一日)にて言及した。

いずれも機関誌に掲載され、同人によって読まれた、同じ「和歌」であると見られないか、ということなのだ。機能として、同じ。——そう見ること、見えてくるものは何だろうか。

「古神道」の系譜において、源流の分岐点にしばしば位置づけられるのが、平田篤胤（二七七六—一八四三）である。「神靈能真柱大人」の神号をもつこの異能の思想家にして異色の学者のもつとも評価された著作の一つが、『靈能真柱』であったからであろう。「古神道」系の思想家たちは、非常によく「勉強」してはいるようなのだが、共通して見るものとまどわせる側面をもっている。『本教自鞭策』を起点とする、キリスト教神学の都合良くゆがめた訳と自身の体系への取り込みには、侮蔑を禁じ得ない読者も多いだろう。出口王仁三郎の『靈界物語』を読んだ子どもは自分たちの知っている鈴木三重吉の『古事記物語』との食い違いに気付き、「この本間違ってる」というかもしれない。ただし、私たちが置かれている、「虚学の失墜」とも「文系の凋落」とも呼べる状況においてこれを見るなら、ある、「意味があるかも知れない」方向性を示唆してくれると、私は言いたいのである。

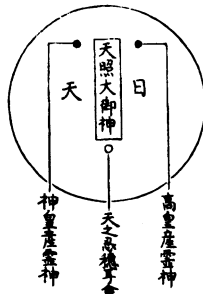
『靈能真柱』は、文化八年二月五日から三〇日にかけて、子安宣邦氏のいわゆる「神懸かり」的作業の「神話」の時空になった、奇跡の著書である。子安氏は、もちろん大いに皮肉を交えて、その「奇跡」について語る。

本居宣長の主著『古事記伝』が三十五年にわたる宮々たる作業の成果であることを思うと、文化八年十二月の一

月に満たない篤胤の作業はあらためてこの作業によって成立する篤胤学の性格は如何という問題の検討へと我々の眼差しを向けさせるだろう。

この書は、一言でいうなら、古事記に記される天地創造神話を、当時の知的水準の中に読みかえる「解釈」の作業だということが出来来る。宣長の『古事記伝』、なかんずく服部中庸の『三大考』をふまえている。例えば、上の図を見て、

第十圖



○天と地と月との大きさ小さきなど、必ずしも図に拘ることなし。また其、各あひさることの遠き近きは、殊に拘はず。此はいたく縮めて図せり。実は遠西の人の製れる、測算の器を以て精しくこれを量るに、日径三十二万九千五百里余り、月径九百三十八里余り、地径三千四百三十里余り。さて地より日の遠きこと二十六万九千六百里余り、月の地を離るゝこと六十万三千三百里余り、と見ゆる也。然れば日径は地径より大ききこと九十六倍余り、月径より大ききなること三百五十一倍余り。さて地径は月径より大なること三倍半余にあたるなり。

誰もがもしろく思うのは、太陽(日天)・月・地球が球体として描かれ、その大きさなるものがともかくも数字で記載されている、という点であろう。そのことについて、同書の中で「篤胤」はいう。

○是は天地泉の連きたるが、みな断れ離れて泉も旋るところの図なり。さてかくのごとく図したるさまは、仮りに、十五日ごろの正午時に、西の方より見たるところの大かたの状態なり。



抑かゝる事どもをさへに云ふを、世の古字者等のいかにぞやと云ふべけれど、こは先年或人と共にかの器を以て自ら測り見たりしに争ひがたきことなれば記せるなり。異しむことなかれ。



月夜見命は即ち、速須佐之男命なり。夜見国を所知看して、如此御名に負ひ給へるなり。

これにつけて思ふに、西の極なる国々の人どもの、万の物すべて風火水土の理りに洩たる事なしとて、此を四元と号て、実に然ることなり、然は有れど、古への正しき伝説のなれば、

その四元の元の謂を知らず、たゞに物をとらえて理りをのみ云ふめるは、なほ未<sup>いま</sup>しきことなりけり。

私は、今、読者に「我慢」を強いているようで、申し訳ない気持ちでいっばいである。ただ、この一見「いにしへぶみ」を至高とする価値観にとらわれて硬直しているとも見える所説の、柔軟な側面について注視してもらいたいのだ。「東洋と西洋の衝突」といった側面から見るのであれば、それは、説明体系の「有効性」の戦いでもあったわけだから。ここで篤胤がしていることは、西洋人から、当時は「蘭学」系の出版物から得た知識を伝統的「体系」の中に取り込んで同化していこうとする姿勢である。自国中心主義的尊大さを、私も醜いと思わないでもないが、それよりも、独自の文化体系を手放さず、新しい事態に対応しようとする、「あらかじめ日本文化の遺伝子の中にあつた特性」を評価すべきかも知れないと思うのだ。

そして、このようなあり方は、「古神道」関係の研究書・啓ゆ蒙書を出版する、日本学術振興会特別研究員としての前歴をもつ、「古神道」研究者が先述の「ガイア仮説」やユダヤ教の「カバラー」に関心を示すことと、パラレルな事象に思われてならないのである。

では、ここで、「文科系の凋落」「虚学の失墜」について何をいおうとしているのか。核心に触れていくための手始めに、おもしろい書籍を紹介したい。小森陽一氏の『ゆらぎ』の『日本文学』（一九九八年九月刊 日本放送協会）である。「ゆらぎ」とは、何だろう。これは物理学上の概念で、「心地よいF分の1ゆらぎ」として、エアコンのコマーシャルのキャッチコピーにまでなった、アレである。「複雑さ」をテーマとする数学・物理学の一分野「フラクタル理論」の用語



である。小森氏が、近代日本文学の出発点として、文字通り「ゆるがぬ位置づけ」を確保し、言い換えれば「ゆるぎない堅固さで近代日本文学という領域を枠づける」画期的な作品として、二葉亭四迷の『浮雲』をもつてきたことの妥当さと効果は明白で、この作品について、氏の企ては、最も適切だったと言えるだろう。『浮雲』は、伝統的にすであつた、講釈師の語り、人情本の文体を基本的には使っていた。しかし、そのことによつて、地の文とセリフ部分の二つの「相」を、氏の言葉借りれば、「文体的な葛藤と（ゆるぎ）」を内部に持っていたのである。二葉亭四迷個人の内部ではロシア文学の「翻訳」という仕事において、もとのロシア語原文を日本語というまったく別の体系をもつ言語に翻訳するという、緊張関係の「場」があつた。時代全体が、自分を適切に表現する「ことば」をもとめて、落語や演説の速記と出版など、さまざまな営為を通して、緩やかにある方向へ動き始めていたからである。

この（ゆるぎ）という科学用語の取り入れは、この作品と時代背景をとつてみれば、秀逸な思いつきといつていいものである。しかも、実は文学という分野、芸術・芸能といった分野における〈複雑なシステム〉という概念、フラクタルやランダムといった概念は、非常に有効なはずのものである。原理的には。しかし、小森氏の著書の価値はどちらかというと近代文学における氏の、広い知識と的確な洞察に負うところが大きい。牧野伸一が酔っぱらいを描くのがうまい、というくだりなどは、おもしろさの極致である。ただ、このきわめて的確に〈はまる〉『浮雲』の成立状況を除けば、必ずしも適切とはいえず、聞き書きの場における「声と文字の（ゆるぎ）」「自己と他者の間の（ゆるぎ）」「倫理的問いかけによる自己分裂の（ゆるぎ）」を、おなじ（ゆるぎ）としてとらえるのは、やはり無理であろう。

時代がどこに動いていくかは、誰にもわからないといつて良い。たとえば、株式相場がいつか暴落するだろう、との予感もがもつとしても、それがいつか、どの程度の規模で起きるのか、予想することはおそらくほぼ不可能であろう。しかし、『浮雲』の時代、文学者も政治家も教育者たちも一般の生活者たちも、ともに新しい時代に「有効」な「こ

とば」を求めていた。そしてそれは膨大な「文学」の営みの果てに獲得されてきたといえる。大きな変化によってもたらされるさまざまな困難や必要について、私たちは道を切り開いていく必要がつけねにある。その営為を担うのは、やはり広義の「文学」的なものではないか。

文学的領域は基本的に「計算不能」なものを本質としている。それは、実はきわめて重要なことかも知れないのだ。物理学的手法を経済学に取り入れた高安秀樹氏は、一九九〇年代初頭のバブルの崩壊をはさんで前後30年の間、日本経済はすでに「定常」<sup>10</sup>の状態にあった。つまり、土地や株の高騰は「とつくの昔に」虚妄なものであったと分析する。その「定常」状態が崩壊する可能性は今後あるのだろうか。あるとすれば、何が起こるのだろうか。そのとき「文学」的営みはそれにどのように関与しうるのだろうか。「文学的領域」は「こころ」と言い換えても良い。

最後に、「ペンローズの量子脳理論」で知られる、ロジャー・ペンローズ<sup>11</sup>の著書から、いくつか引用して、本稿を閉じることにはしたい。

「理解することが出来るといふ人間の能力は、脳あるいは心の何らかの（非計算的）な活動によらなくては達成出来ない。」

11 『経済物理学の発見』（二〇〇四年九月刊 光文社新書）、その他。

『皇帝の新しい コンピュータ・心・物理法則』（みすず書房）一九九四年十二月・『心の影 意識をめぐる未知の科学を探る 1』（みすず書房）二〇〇一年十二月・『心の影 意識をめぐる未知の科学を探る 2』（みすず書房）二〇〇二年四月その他による。

「心が正確なコンピューターに優る要因が心の不正確さにある、という考え方には、本質的うたがわしさがある。」  
(つまり、洞察は、大まかさではなく究極の正確さだ、ということか)

「ある型の二人ゲームでは、それぞれのプレイヤーにとって、最適な戦略は、完全にランダムな構成要素をもって  
いる。」「一方のプレイヤーがランダム性を一貫して排除しようとすると、ゲームが充分長く続いたときには、他  
方のプレイヤーが原理的に有利になる。」「ランダム性は〈自然淘汰〉に有利な要因である」